2022年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/ 9 /29

団体名	NPO法人南大阪サポートネット	活動タイトル	不登校からひきこもり状態となった子どもの保護者への包括的な支援事業

望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）

●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	子どもも大人も丸ごと存在として認められ、感じて考えたことを基に多様な生き方を選択でき、いつでも一休みできる。安心して希望をもって幸せに生きてゆける社会。不登校・ひきこもり・発達特性・精神疾患・LGBTQ・社会的養護・被虐待・貧困など、多様な存在がそのまま認知され、社会のチームの一員として体験を通して得た力を発揮できる 大人は世代間の違いや価値観・主義主張の違いがあっても、子どもたちを見守り、求められれば手伝い、応援し、生きやすい社会にして手渡そうとしている。
●団体の社会的役割（ミッション）	当団体の社会的役割は「子どもも大人も丸ごと認められ尊重される地域社会づくり」であり「生きづらさを抱えた子どもや人」に寄り添い一緒に考え歩んでゆく。行動指針は「おたがいさま」で、未来の子どもたちへの恩送りである。 １）不登校やひきこもり体験者が、学びと交流・多様なチャレンジができる居場所を、保護者や元当事者らと維持運営する。 ２）社会に公正な理解を促す発信をする。保護者の学び直しや活動への参画を通してピアサポーターを増やし、安全で包括的な相互扶助の場を作る。
●団体の活動基盤	●人材の確保と育成：同じ体験をした保護者や元当事者の中から、力になりあうピアサポーターを増やし、スタッフの増員につなげる。医療・福祉・心理等専門職の外部協力者を探す。 ●望ましい物的資源：居場所兼事務所を安定して活動できる物件に移転できるように探す。事業で活用する食材や物品等の寄付受付のシステム化を模索する ●望ましい活動資金：会員の増加（36名→50名）自主事業の採算化による自主財源の増加

■活動風景

応援講座「心理学からのヒント」グループディスカッションの様子

■活動報告

●不登校ひきこもり「窓口」の開設
不登校からひきこもり状態になった子どもを持つ保護者が、①安心して支援とつながれる②状況に変化を起こしたい時に次のステップに踏み出す機会を得られる。孤立や不安が和らぎ、ピアの仲間から集積した情報を知れる。開催方法：いつでも受付し個別対応・イベント
●親御さんの応援講座（3種類10回）を実施
①家庭の循環をよりよいものにしていこうとする変化を支える　グループカウンセリング5回
②不登校ひきこもり相談を長年行う「広木先生のグループカウンセリング」公開講座1回
③最も身近な支援者として心理の視点を学ぶ共育ち講座「**心理学からのヒント」4回**
●グループ相談会（ピアサポートグループ3回）の実施
安全が保障され安心して実情や悩みを語り合う交流と相談の場。状況や関心・課題に応じたテーマを決めて実施。
●活動基盤の強化：「公正な理解を促す集い」の実施（3回）他、事業全般
児童委員・民生委員・一般市民・ボランティアなどを対象に、現在の社会課題としての状況・体験談やアンケートからの心情理解・当団体の活動紹介を行った。

■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)

本事業は、「不登校からひきこもり状態になった子どもの保護者への包括的な支援」という目標に対し、以下のとおり実施した。
●実情を理解したピア相談員とピアカウンセラーによる「窓口」（13回）
傷つきや疲弊・たらい回しのない、安心安全な「窓口」を実現し、孤立の防止につながった。気持ちが軽くなった87%近隣市・公共施設でのイベントや講座の機会も使って開催
●親御さんの応援講座。未来のための共育ち（10回）
・身に着けた価値観や言動の、学び直しによる変化を支える「グループカウンセリング」6回
効果想定は6段階30項目のアンケートによる比較。
・共育ちのための「心理の視点」を学ぶ4回。9割以上が自己理解・子ども理解が進んだ。
●グループ相談会（ピアサポートグループ3回）
前年度のリピーターが中心となって機運が盛り上がり、元当事者や家族+支援者で、力になりあうピアサポートグループ「えすこーと」結成に至った。満足度は5段階で95%
●活動基盤の強化：事業全般と「公正な理解を促す集い」3回を通じて
会員増36名⇒45名、スタッフ2名増。「不登校・ひきこもり問題を一緒に考える」集いで、社会課題としての現状や保護者の実情への理解が進み、児童委員、民生委員等の保護者へのまなざしが受容的に変化し、支援活動の必要性に理解が進んだ。協力の申し出11件

ピアサポートグループの様子

■事業を通じて得られたノウハウ

●包括的支援などで保護者が少し楽になり、家庭の循環が変わり始めると、子どもは安心して心身を休めて治癒に向かうことが多い。しかし保護者だけでなく子ども自身も「将来の不安や世間的評価の目」で心を縛っていることが多く、これを手放すには「自分は丸ごとあるがままの自分で大丈夫だ」という体験と支えが必要となる。重要なのは、子どもの心のエネルギーが溜まって外に出始める時期に、子どもの「つらさ」を理解し共感的に寄り添える第三者と一緒に日々の具体的なことをする体験である。このかかわりは我が子には難しいので、他のピア（=仲間）がナナメの関係でのサポーターとなることが望ましい。
当該地域ではひきこもりの時期に学校制度の支援は乏しく、保護者だけがこの役割をも担っている現状がある。
●外部の専門家の全面的な協力で「コミュニティ心理学」の観点から、親御さん・支援者・一般市民共通の講座を実施した。またグループカウンセリング運営のノウハウを得られた。

■望ましい社会状況を達成するための課題

不登校からひきこもり状態となる子どもの多くは、最大限に努力したにもかかわらず様々な要因が重なって疲れ果て、無力感に陥り動けなくなってしまうのであり、現代社会では誰にでも起こりえることである。ひきこもり状態では外部の支援が使えず、生活・学習環境の全てを保護者が担うことになる。社会規範の中で暮らす保護者は、混乱して強い自責と孤立感に苦しむことが多い。保護者が少しでも楽になり、子どもの状態を受け入れ味方になることは、子どもが心のエネルギーを溜めて自身の課題に取り組むために不可欠である。
元親の恩送りとして、学び直しと個別・グループでの心理的支援、実情が解り共感できる仲間（=ピア）との支えあいからスタートした事業は2年目に継続され、早期につながるための『窓口』を開設し、家庭を取り巻く環境を改善するために地域に公正な理解を促す発信を始めることができた。保護者や子どもたちが自己肯定感を育み、不登校やひきこもりという体験そのものが、人間としての成長・成熟への過程となりうるように。そのための関わりができる大人が、一人でも多く住まう地域社会づくりに向けて活動する必要がある。

■活動成果のアピールポイント（自由記入）

この1年間の活動を通じて	不登校からひきこもり状態になった子どもを持つ保護者に有効な学びのスタイルと、近隣の類似団体との協働による支えあえる体制づくり	を達成しました。

■受益者の具体的な変化（自由記入）

講座やグループで共に学ぶ保護者の子どもたちが家から出始めて、イベントや居場所に親子で参加し、交流することがありました